



PISA

IN FOCUS

26

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

成績評価について

- 評点の使い方は国によって異なるが、一般にどの国もスキルの習熟と意欲的な学習態度に見返りを与える傾向がある。
- 教師は、男子生徒や社会経済的に恵まれない生徒よりも成績や態度が優れない場合であっても、女子生徒や社会経済的に恵まれた生徒に対し、高い評点を与える傾向がある。
- 評点は学校での生徒の成長を評価するだけでなく、学校で尊重されるスキル、行動、習慣、態度についても示す。

学校の評点は、生徒たちにとって単に不安、そして誇りの源であるだけではない。それは教育に関する価値観と良い学習者になるために必要なスキルを社会が伝える方法である。生徒たちに各自の発達度を知らせ、教師たちに生徒たちの必要としているものを気づかせ、教師や学校が求める課題や能力に関する生徒たちの習熟度を確認することによって、評点は生徒たちの学習を促すという第一の目的を達成する。

評点は生徒に長期的な影響を及ぼすことがある。

学校での評点を通して、教師たちは、学習を促進する目的で特定の習慣、態度、行動に見返りを与える。どの国及び地域でも、教師たちは

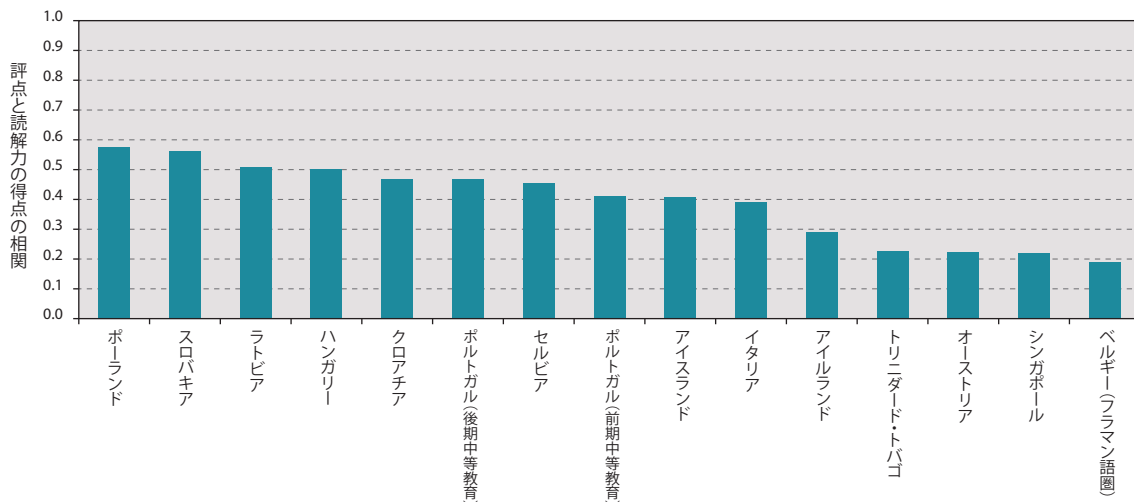
国語の評点を通して読解力における能力とスキルの習熟度に見返りを与える。ほとんどが、楽しむための読書や、効果的な学習方略と良好な生徒と教師の関係に用いることのような生涯学習に必要なスキル、態度、習慣、行動にも見返りを与える。これは望ましいと同時に期待されていることでもあるが、教師たちはその他のことに対しても見返りを与えると思われる。



PISA

IN FOCUS

生徒の国語の評点とPISAの読解力の得点との間の相関関係



注: マカオ、メキシコ、ニュージーランドは、地区や学校によって異なる評価方法(合/否)で、生徒の評点を測っているため、この表からは除外されている。国と地域は、国語における落第点の生徒の割合の多い順に並べている。

出典: OECD (2012), *Grade Expectations: How Marks and Education Policies Shape Students' Ambitions*, PISA, OECD Publishing, Table B2.3.

それよりも問題なのは、学校と教師たちが、学習と関連性のない、特定の生徒の特徴に系統的に見返りを与えることがPISAによって明らかになったことである。例えば、生徒の読解力、学習習慣、学校及び学習に対する態度を考慮すると、すべての国及び地域で女子生徒たちや社会的に恵まれた生徒たちが、他の生徒たちよりも高い評点を獲得している。この慣行は、二つの理由から、広範で長期的な影響を及ぼす可能性がある。生徒たちは学校で得た評点を基にして継続教育やキャリアに対する期待を抱く場合が多いことである。一方で学校システムでは、評点を使用して学問に向けたプログラムや、後に大学進学に関して生徒を選ぶ基準とすることである。

世界中の学校が評点を利用している…

PISA2009年調査に参加したすべての国及び地域(韓国を除く)の生徒の95%以上が、教師の作成したテスト、生徒ポートフォリオ又は生徒プロジェクトを通して生徒の成績を評価する学校に通っている。ほとんどの場合、生徒たちは、学校の評点という形でこうした評価のフィードバックを受け取っている。PISAでは、教育システムにおける評価の利用方法や評価が公正に与えられているか否かを見極めようと努めた。およそ17の国及び地域が、PISA2009年調査の評価を行う際に学歴に関する追加のアンケート票を配布した。アンケート票には、以前の国語で得た評点について生徒に尋ねる質問が含まれていた。

…しかし、その方法は異なる。

評価制度が共通している国や地域はほとんどない。それどころか、国内でさえ、各校が異なる評価方法を用いていることもある。さらに、それぞれの教育システムで、生徒にクラス又は評価に不合格だったことを通知する独自の方法を定めている。中には、不合格に一つの値しか認めない評価制度の国々もある。すなわち、不合格の生徒たちは自分が合格基準からどれほど離れているかを知ることができない。これに該当するのは、オーストリア、クロアチア、ハンガリー、ポーランド、セルビア及びスロバキアである。合格ラインを尺度の中ほどに定めている国々もあり、これによって生徒たちは自分が最低限の合格基準からどの程度離れているかを知ることができる。例えば、ベルギーのフラマン語圏、イタリア及びシンガポールは、合格/不合格の境界線を評価尺度の範囲の50%と定めている。アイルランドでは、評価尺度は0から100までであるが、不十分又は不合格とみなされるのは40未満の評点だけである。一部の国々、例えば、オーストリア、ハンガリー、ポーランド及びスロバキアでは、それ以外の評価尺度の値が「可(sufficient)」「良(good)」「優(verygood)」「秀(excellent)」などの明確ではっきりとしたラベルで合格点の質を反映している。それに対し、アイスランドやアイルランドなどの国々ではより幅広い数値の配列を用いている(例:50から100まで、10から20まで、又は6から10まで)。



国・経済圏全体における評点システム

落第点	評点の範囲					学校または地域で異なる評点システムがある
	1～5	1～6	1～10	1～20	1～100	
複数の値	ポルトガル (前期中等教育)		アイスランド、 イタリア、 ラトビア	ポルトガル (後期中等教育)	ベルギー (フラマン語圏)、 アイルランド、 シンガポール、 トリニダード・トバゴ	マカオ、 メキシコ、 ニュージーランド
一つの値	オーストリア、 ハンガリー、 セルビア	クロアチア、 ポーランド、 スロバキア				

出典：OECD (2012), *Grade Expectations: How Marks and Education Policies Shape Students' Ambitions*, PISA, OECD Publishing, Table B2.1.

生徒の可否を決める学校システムも大きく異なる。ポルトガルでは、前期中等教育学校の生徒の30%以上が不合格の評点をつけられ、この割合は、その学歴において留年したことを報告する生徒の割合の大きさと一致している。不合格の評点をつけられる生徒の割合はイタリア、マカオ、ニュージーランド及びシンガポールでも高く、少なくとも生徒たちの10%は国語の授業で不合格の評点をつけられたことを報告した。不合格の評点をつけられることが比較的少ないのはオーストリア、ベルギー(フラマン語圏)、クロアチア、ハンガリー、アイスランド、アイルランド、ラトビア、ポーランド、セルビア及びスロバキアで、不合格の評点をつけられたのは生徒たちの5%未満である。

効果的な評価慣行

- 評点は学習を促す目的で明確かつ有用な情報を伝えるべきである。
- 評点は明確かつ具体的な基準に基づき、あらかじめ定められた目標に対する到達度を評価するべきである。
- 評点は期待を示すため、あるいは行動や筆跡を判断するために用いるべきではない。必要であれば、行動に関する評点と成績に関する評点を分ける。
- 学習が遅いあるいは終わらなかった生徒を罰するために、評点を用いてはならない。
- 合格ラインをはるかに下回る評点は生徒たちのやる気を失わせ、それ以上努力する意欲を失わせることがある。
- 分布曲線に基づく評点は、不健全な競争を生み、意欲を押しつぶすため、すべきでない。
- すべての評価エクササイズに評点を付けて生徒に返す必要はない。
- 特定の状況では、数値の評点と関連性のない質的個人評価が望ましい。

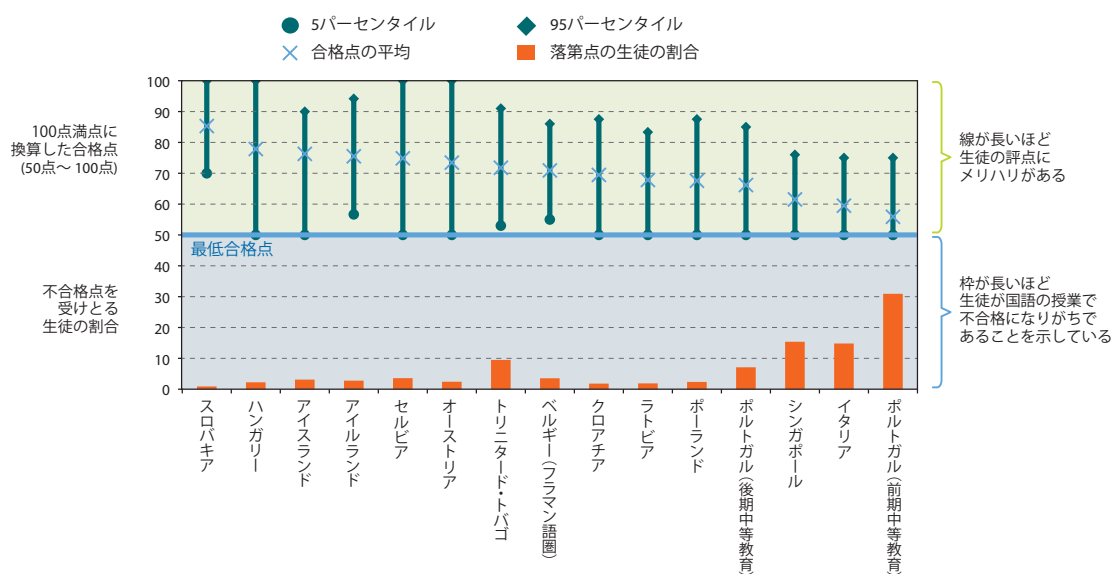


PISA

IN FOCUS

分析により、限られた数値で、到達度の明確な分類(例:「可」「良」「優」「秀」)を示すラベルを用いる評価システムのある国及び地域は、生徒たちの相対的成績にメリハリを付けることができることが示唆されている。各評価システム上の全ての評点の値が必ず用いられているというわけではないが、オーストリア、ハンガリー、ポーランド及びセルビアでは、生徒たちの評点がイタリアやシンガポール、ポルトガルの前期中等教育学校ほど平均の周辺に集中せず、後者では合格の最高評点あるいは最低評点を付けられる生徒は、比較的少ない。

国及び地域は「合」「否」をどう定義しているか



注: マカオ、メキシコ、ニュージーランドは、生徒の合否の評点が、地区や学校によって異なる評価システムでつけられているため、この図では省いている。比較のため、合格の最低評点を50、評価システム上の最高評点を100、の100点満点に換算している。

合格点の平均の高い順に左から並べている。

出典: OECD (2012), *Grade Expectations: How Marks and Education Policies Shape Students' Ambitions*, PISA, OECD Publishing, Table B2.2.

結論: 学校内で起こることにも、卒業後に起こることにも、評点が重要であることを考慮すると、学校システムが評価方針を一般評価及び評価の枠組みと連携させ、生徒たちの学習に資する行動や態度に見返りを与える効果的な評価慣行を促進することが不可欠である。

本稿に関するお問合せ先

担当: Guillermo Montt (Guillermo.MONTT@oecd.org)

出典: OECD (2012), *Grade Expectations: How Marks and Education Policies Shape Students' Ambitions*, PISA, OECD Publishing.

参考サイト:

www.pisa.oecd.org

www.oecd.org/pisa/infocus

次回テーマ:

「通っている学校は生徒の成績に影響を与えるのだろうか」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。